

(独立行政法人教員研修センター委嘱事業)

教員研修モデルカリキュラム開発プログラム

報 告 書

プログラム名	公開保育の組織的展開を基軸とした 研修モデル・カリキュラムの開発 —幼保統合の「保育実践知」の養成をめざして—
プログラムの 特徴	幼稚園の教員と保育所の保育士が互いの保育を見あう公開保育を通年で組織化し、幼保の保育者の保育実践に対する共通理解を進めながら、実践分析力、実践力、省察力を育成し、「保育実践知」を形成していく研修カリキュラムを開発する。

平成23年3月

奈良教育大学

奈良市教育委員会

# I プログラムの概要

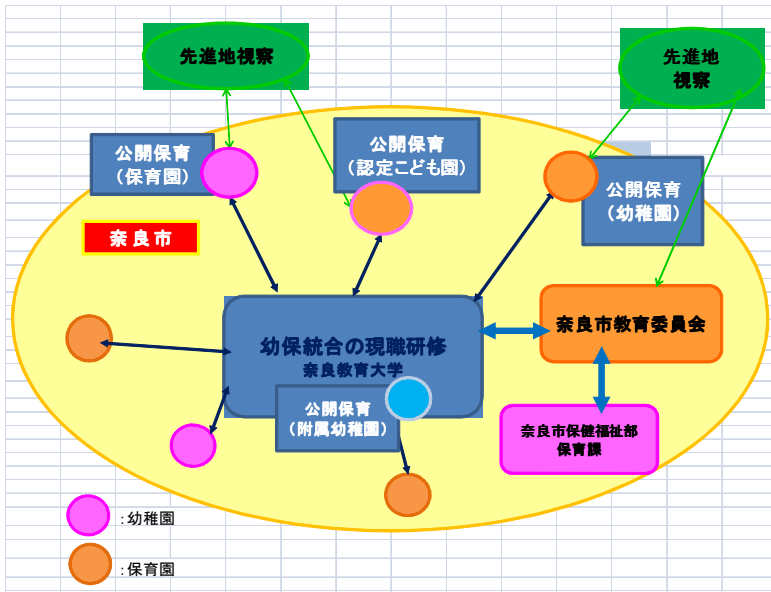


図1 研修体制（組織図）

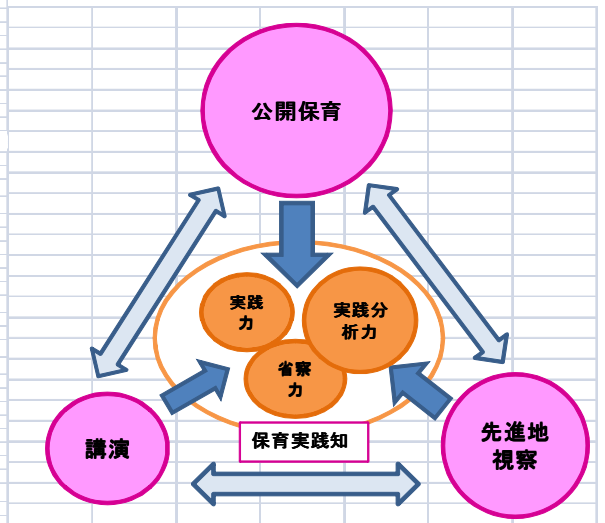


図2 研修方法

	公開保育	日常の保育	講演会	先進地視察
4月	オリエンテーション			
5月	大学附属幼稚園			
7月	市立幼稚園 全体討議			幼児教育全般 全国幼児教育研究大会(福岡) こどもの城(渋谷区)
9月				保幼小連携 信州大学附属幼稚園 舞浜幼稚園・小学校(浦安市) 第一日野幼稚園・小学校(品川区)
10月	市立認定こども園 全体討議			
11月	市立保育園 全体討議		幼児教育の今後 無藤 隆氏	認定こども園 おおたや保育園(足立区)
12月				認定こども園都祁保育園(奈良市) 認定こども園高田こども園(大和高田市)
1月				
2月			「対話的保育」カリキュラム への誘い	
3月	総括		加藤 繁美氏	研修報告会

図3 研修プログラム開発イメージ

(7月～1月に実施)

## II 開発の目的・方法・組織

### 1. 目的

「子ども・子育て新システム」（平成22年6月）において「幼保一体化」が打ち出されているように、今後、幼稚園・保育所双方に対応できる保育者の力量形成は必須である。奈良教育大学は、平成16年に奈良市と「奈良教育大学と奈良市との連携協力に関する協定」（教育連携に係る包括協定）を結び、それに基づき、奈良市教育委員会（及び奈良市保健福祉部保育課）と緊密な連携をとってきた。平成19・20年には文部科学省専門職大学院等教育推進プログラム「幼保統合の『保育実践知』教育プログラム」を、平成21年度には教員研修モデル開発プログラム「幼保統合の現職研修のためのモデル・カリキュラム開発」を展開し、幼保を統合する保育力量の形成を、養成と現職研修を一体化し推進してきた。

これらの取組の中で明らかになったのは、保育実践の中核をなすのは眼前の子どもの姿をみとり「刻々に判断し行動する」力、すなわち「保育実践知」であり、これは実践と理論の往還、つまり「見る・とりこむ」（実践分析）、「行動する・つくりだす」（実践）、「ふりかえる」（省察）といった3つの学びの循環によって形成されることである。

しかし一方で、幼保統合については、幼保の保育者それぞれが捉える子ども理解や援助のあり方に相違が見られ、ことばのみの講義形式の研修では限界も指摘された。そうしたなか、双方の共通理解を促したのは、幼保が相互に行った保育公開の場であった。互いの実践や保育案など、具体的な子どもの姿を真ん中に置きながら行った意見交流が幼保の相互理解を促し、各自に必要な「保育実践知」を捉える機会にもなったのである。

本プログラムではこうした成果を活かし、幼保の現職が互いの保育を見合う公開保育を通年で組織化する。そして、実践分析力（「見る・とりこむ」）、実践力（「行動する・つくりだす」）、省察力（「ふりかえる」）を育成しながら、幼保の保育者の共通理解を進め、各自に求められる「保育実践知」を明確化し、形成していく研修カリキュラムを開発する。また公開保育の際には、平成21年度の「教員研修モデル開発プログラム」で策定した「奈良市幼保統合の保育カリキュラム」をもとに保育計画を立て、実践する。カリキュラムと実践を往還させることによって、カリキュラムの自己点検、評価、改善のあり方、すなわちカリキュラム・マネジメントを実施する力の育成も本プログラムの目的とする。

### 2. 方法

#### 2-1. 体制

##### (1) 幼保統合協議会

プログラム開発の中心を担うべく、奈良教育大学、奈良市教育委員会および奈良市保健福祉部の9人が幼保統合協議会を構成した（次ページ、表1参照）。協議会は、初回協議会で、大学・教育委員会、双方の担当者が揃って本事業についての共通理解を図り、1年間の研修の流れを確認した。それ以降は、原則、大学・教育委員会各2名による協議会を

研修実施前に計 8 回開催した。

表 1 幼保統合協議会委員一覧

No	所属	氏名	担当・役割
1	奈良教育大学 教育学部 准教授	横山 真貴子	全体統括・責任者
2	奈良教育大学 教育学部 教授	瓜生 淑子	開発取組の企画・運営担当
3	奈良教育大学 教育学部 准教授	掘越 紀香	開発取組の企画・運営担当
4	奈良市教育委員会事務局 学校教育課 課長	石原 勉	全体統括・責任者
5	奈良市保健福祉部 保育課 課長補佐	松岡 秀子	保育所関係担当
6	奈良市立六条幼稚園 園長	松本 知子	事務局
7	奈良教育大学附属幼稚園 副園長	上野 由利子	国立大学附属幼稚園関係担当
8	奈良市教育委員会事務局 学校教育課 指導主事	村田 三美	幼稚園関係担当
9	奈良市保健福祉部 保育課 主査	尾上 啓子	保育所関係担当

## (2) 研究員

研究員は、プログラム終了後も各園で核となって実践していけるよう、奈良市全体を俯瞰し、公立・国立幼稚園から 18 名、公立保育所から 13 名、計 31 名を選出した。幼稚園・保育所とも、ベテラン層と若手層を交えて選出し、研究員同士が交流し、関係を深めることで、プログラム終了後も研究員のつながりを生かした活躍を期待した。

### 2-2. 内容展開の特徴

#### (1) 「公開保育」の組織的展開

- ・「公開保育」内における展開：実際に保育環境、子どもの姿、保育者のかかわりなどを、幼保の保育者が見あったうえで、自己の保育の「ふりかえり」を行い、「意見交流（学びの共有）」、大学教員による「指導助言（総括）」を聞き、各自の学びを発展させる。
- ・「公開保育」間の展開：幼稚園（国立・公立）、保育所、認定こども園といった異なる保育機関での公開保育を重ねる。前回の研修での学びを次の研修機会で「ふりかえり」、確認するとともに、新たな学びを展開させることが可能になる。

#### (2) 「先進地視察」の結果の共有

- ・個別視察：「幼保統合」「保幼小接続」の観点から選定した先進地域を、研究員が各 1 回ずつ視察する。その際、できるだけ幼保の保育者が共に同じ視察先に出向き、交流を深める。
- ・全員視察：全研究員による視察も実施し研究員相互の交流を深め、研修効果を高める。
- ・視察報告会：視察成果を研究員全員が共有できるように報告会を実施する。個人の学びを全体の学びに広げ、奈良市全体の保育の質を高めることを目指す。

### Ⅲ 研修プログラムの開発とその成果

#### 1. 研修の概要

本プログラムでは、幼稚園と保育所の保育者が互いの保育を見あう公開保育を通年で組織化し、目の前の子どもの姿をみとり「刻々に判断し行動する力」、すなわち「保育実践知」の形成を目ざした。

具体的には、表2に示したように、年間を通して4回の(1)公開保育に加えて、(2)先進地視察と、2回の(3)講演会を実施した。これにより、31名の研究員全員が集う研修機会を計9回もった。

表2 実施研修の概要(日程・内容・目的)

日程	内容(会場・講師)	目的
第1回 4月 24日 (土)	○「オリエンテーション」 ・内容：研修のコンセプト、 研修カリキュラムの説明など ・会場：奈良教育大学	・本研修カリキュラムの趣旨を理解する。 ・受講生が各自「保育実践知」形成における具体的な課題を設定する。
第2回 5月 22日 (土)	○公開保育1：国立大学附属幼稚園 (奈良教育大学附属幼稚園) ・内容：保育案作成、保育公開、実践検討、 実践の省察	・幼稚園での実践を「見る・とりこむ」ことで自らの実践を「ふりかえり」、実践分析力と省察力の形成を目ざす。 ・受講生が各自の課題について、学びの成果を評価する。
第3回 7月 2日 (金)	○公開保育2：公立幼稚園 (奈良市立六条幼稚園) ・『奈良市立幼稚園・保育園・認定こども園 教育・保育カリキュラム』(以下『教育・ 保育カリキュラム』)に基づく保育案作成、 保育公開、実践検討、実践の省察 ・意見交流(幼保の保育者の子ども理解・ 援助の捉えの共有) ・実践と理論の往還 (指導助言：奈良女子大学准教授 本山方子氏)	・公立幼稚園の保育実践を「見る・とりこむ」 ことで自らの実践を「ふりかえり」、 実践分析力と省察力の形成を目ざす。 ・『教育・保育カリキュラム』の評価・改善。 ・受講生の学びの自己評価。
第4回 10月 22日 (金)	○公開保育3：認定こども園 (奈良市立認定こども園富雄南幼稚園) ・『教育・保育カリキュラム』に基づく保育 案作成、保育公開、実践検討、実践の省察 ・意見交流 ・実践と理論の往還 (指導助言：奈良女子大学准教授 本山方子氏)	・認定こども園の保育実践を「見る・とり こむ」ことで自らの実践を「ふりかえり」、 実践分析力と省察力の形成を目ざす。 ・『教育・保育カリキュラム』の評価・改善。 ・受講生の学びの自己評価。

第5回 11月 8日 (月)	○公開保育4：公立保育園 (奈良市立京西保育園) ・『教育・保育カリキュラム』に基づく保育 案作成、保育公開、実践検討、実践の省察 ・意見交流 ・実践と理論の往還 (指導助言：帝塚山大学教授 清水益治氏)	・公立保育園の保育実践を「見る・とりこむ」 ことで自らの実践を「ふりかえり」、 実践分析力と省察力の形成を目指す。 ・『教育・保育カリキュラム』の評価・改善。 ・受講生の学びの自己評価。
第6回 11月 12日 (金)	○講演会1： 「幼児教育の今後：幼保一体化と小学校への 接続の流れの中で」 (講師：白梅学園大学教授 無藤 隆氏) ・会場：春日野荘（奈良市法蓮町757-2） ・対象：奈良市公立所園の保育者、教育委員会、 保育行政関係者、及び学生	・今、まさに大きく動きつつあるわが国の 幼児教育について、施策の中心にいる講 師を招き、その動向を知るとともに、今 後の奈良市の保育のあり方について考え る。
第7回 1月 22日 (土)	○合同視察研修： ・奈良市立認定こども園都祁保育園 (奈良市都祁白石町1026-6) ・大和高田市立認定こども園 高田こども園 (奈良県大和高田市内本町1801-7)	・幼保の一元化・一体化を先進的に進めて いる県内の保育施設（認定こども園）を 研究員全員で視察する。研究員の交流を 深めるとともに、学びを共有し、今後の 奈良市の保育のあり方についてともに考 える機会とする。
第8回 2月 27日 (日)	○講演会2： 「『対話的保育』カリキュラムへの誘い <sup>いざな</sup> 」 (講師：山梨大学教授 加藤繁美氏) ・会場：春日野荘（奈良市法蓮町757-2） ・対象：奈良市公立所園の保育者、教育委員会、 保育行政関係者、及び学生	・『教育・保育カリキュラム』の評価・改善 のために、保育カリキュラムの専門家 を講師に招き、子どもの見取りを中心 にすえたカリキュラム作成のあり方と、 カリキュラムに基づく保育実践の進め 方を学ぶ。
第9回 2月 27日 (日)	○視察研修報告会 ・先進地域への研修視察の報告と検討 ○まとめ ・研修の総括：振り返りと評価。 ・会場：春日野荘（奈良市法蓮町757-2）	・個別に実施した研修成果を、研究員全 員で共有する。 ・研究員各自が研修を振り返り、学び の成果を自己評価するとともに、研 究員全員で学びを共有する。

### 1-1. 公開保育

国立大学附属幼稚園、公立幼稚園、公立認定こども園（幼稚園型）、公立保育所の4園で公開保育を実施した（表2参照）。原則、研究員には、毎回参加を求めた。第4回の保育所での公開保育を除き、公開保育では、研究員に加え、奈良市の公立園の保育者の参加を認め、市内全域の幼保の保育者に研修機会を広げた。

## 1-2. 先進地視察

視察研修では、特に「幼保統合」の観点から先進地域を選んで実施した。原則として、研究員は1回ずつ、幼保一元化・一体化、保幼小連携等に先駆的に取り組んでいる地域、学校園への視察を行った。視察先を表3にまとめた。

視察にあたっては可能な限り、幼保の保育者が同じ研修に参加し、交流できるように配慮した。特に、近隣の幼保一体型施設視察は原則全員参加とし、貸し切りバスで研究員他33名が参加し、研究員の相互交流のよい機会となった。

また、個々の研究員の視察研修成果を共有し、学びを深めるために、2月末には視察研修報告会を開催した。

表3 先進地視察の研修概要（内容・日程・参加人数）

	研修内容	目的地	日程	人数	
				幼	保
1	幼児教育全般	全国幼児教育研究大会 福岡大会 (福岡県北九州市)	7月26日(月) ・27日(火)	1	0
2	幼小連携	信州大学教育学部附属松本小学校・幼稚園 (長野県松本市桐1-3-1)	11月13日 (土)	7	0
3	保幼小連携	千葉県浦安市立舞浜幼稚園・舞浜小学校 (浦安市舞浜)	11月18日 (木)	0	2
4	幼保一元化・ 一体化	東京都足立区立おおやた幼保園 (足立区大谷田2丁目1番9号) 子どもの城(東京都渋谷区神宮前5-53-1)	11月19日 (金)	5	5
5	保幼小連携、 幼保一元化・ 一体化	品川区教育委員会研究学校(園)共同研究会 (品川区第一日野小学校、第一日野すこやか 園ほか)	1月21日(金)	4	4
6	幼保一体化・ 一体化	奈良市立認定こども園都祁保育園 (奈良市都祁白石町1026-6) 大和高田市立認定こども園高田こども園 (奈良県大和高田市内本町1801-7)	1月22日(土)	15	11

## 1-3. 講演会

市内の全保育関係者が学ぶ機会として、対象を研究員だけではなく、市内の公立園の保育者、及び教育委員会、保育行政関係者、学生に広げた講演会を2回開催した。

研究員にとっては、公開保育や先進地視察でとらえた保育実践の具体について理論的な学びを重ねることができ、より研修効果を高めることができた。

## 2. 研修の実際：具体的内容と成果

### 2-1. 公開保育

#### (1) 第1回 公開保育：国立大学附属幼稚園

○日時 平成22年5月22日(土) 9:20～16:00

○対象園 奈良教育大学附属幼稚園(奈良市高畑町354)

○参加者 51名(本プログラム関係者数。内、研究員27名)

○目的 ①園の研究主題にそって研究を重ねている大学附属幼稚園の実践を「見る・とりこむ」ことで自らの実践を「ふりかえり」、実践分析力と省察力の形成を旨とする。

②研究員が各自の課題について、学びの成果を評価する。

○日程 9:20～11:15 公開保育

11:30～12:00 全体会(研究について)

12:00～13:00 昼食

13:00～14:15 学年別分科会

14:15～16:00 講演『子ども・若者の生きづらさと自己肯定感』  
立命館大学教授 高垣 忠一郎氏

○概要 園の研究主題：『自尊心の育ちに視点をあてた教育課程の改善』

対象園では、平成16年度から「自尊心の育ちを考えるーかけがえのない自分を大切に思う心を育む」をテーマに研究に取り組んでいる。昨年度からは教育課程の改善を進めており、本公開保育では、教育課程に基づき3歳児1クラス、4、5歳児各2クラスの保育が展開された。

#### ○成果：研究員の自己課題の明確化

本プログラムでは、研修に先立ち各研究員が保育の「領域」の観点から各自の課題を設定し、公開保育後は毎回、その課題にそった自己評価(ふりかえり)を行った。

第1回目の公開保育後の自己評価では、課題を設定しつつも「どのような視点で保育を見ればよいかわからず漠然と参加することしかできなかった」(幼稚園)、「環境や子どもの姿が全体的にしか見れていなかった」(保育所)といった記述や、子どもをみる視点は定まっても「環境に関する視点から幼児の姿を見ようとするが、改めて、幼児の思いを理解することの難しさを感じた」(幼稚園)、「子どもの姿から思いを読み取ることはできても、その姿から、どのようなところが成長してきたのか、また課題は何なのか、どのような援助や課題が必要なのかを読み取ることはまだまだ難しく感じました」(幼稚園)といった記述が見られた。

「保育を見る」「子どもの見取り」と一口にいても、その内容には「視点」「子どもの思い」「子どもの育ち」など、さまざまな観点がある。本公開保育への参加は、経験年数の異なる研究員それぞれが、自分の課題がどこにあるのか、自己の課題を意識化するよい機会となった。



## (2) 第2回 公開保育：公立幼稚園

○日 時 平成22年7月2日(金) 9:00~14:00

○対象園 奈良市立六条幼稚園(奈良市六条2丁目14-2)

○参加者 52名(内、研究員26名)

○目 的 ①公開園(幼稚園)の実践を、園の研究テーマにそって「見る・とりこむ」ことで自らの実践を「ふりかえり」、実践分析力と省察力の形成を目指す。

②受講生が各自の課題について、学びの成果を評価する。

○日 程 9:00 ~ 9:15 園の研究主題について(園長説明)

9:15 ~ 11:30 公開保育

11:30~12:15 昼食

12:15~14:00 研究協議

○指導助言 奈良女子大学准教授 本山方子氏

○概 要 園の研究主題：『たくましく生きる力をはぐくむ幼稚園教育の創造：夢中になって遊び続ける子どもを目指して』 研究員は、年少(4歳児)、年長(5歳児)各2クラスの公開保育参観を行い、対象園の研究主題に沿って「夢中になる子どもの姿」を自らの課題の観点から見取ることを目指した。



夢中になる子どもを見る

研究協議では、保育を担当した保育者からこれまで遊びの流れと当日の子どもの様子について説明を受けた後、参加の研究員が見取った「夢中になっていた子どもの姿」を報告し合った。指導助言の本山氏からは「『夢中になる』という課題の構造」について、「夢中になる」とは「保育者側のめあて・評価」と「子ども側のめあて・評価」の二重構造をもつ。それゆえ、どの位置で語るのか(混ぜる・分ける)を意識化することが重要であること。その上で「保育をどう作っていくか」、つまり「夢中になること」を保育のどこに埋め込んでいくかを考えていくことが必要になることを、公開保育当日に見られた子どもの姿の具体例に挙げながら、指導いただいた。

### ○成 果 : 互恵的な学びの展開

今回から、保育実践を提供する公開園の保育者の研修効果を高めるために「保育を見る」視点を公開園の研究主題に置くことにした。それゆえ、公開保育後の自己評価(ふりかえり)の記述には「他の先生がされている保育をじっくり見る時間がなかなかないので、公開保育へ参加できることは、自分自身の保育はどうなのかと振り返ることもでき、また、新しい刺激にもなり良かった(幼稚園)といった参加者の学びに加えて、「今回は、公開保育をする側として研修に参加した。そのため、当日までに園内で研究主題について話し合ったり環境について見直したりする良い機会となった」「多くの幼稚園、保育園の先生方から自分の保育や、クラスの子どもたちをいろいろな視点から捉えた意見を聞くことができた。」(幼稚園)というように、実践を提供する側の学びの深まりもみられた。

### (3) 第3回 公開保育：公立認定こども園

○日時 平成22年10月22日(金) 9:00～14:00

○開催園 奈良市立認定こども園富雄南幼稚園(奈良市中町4174)

○参加者 44名(内、研究員25名)

○目的 ①公開園(認定こども園)の実践を、園の研究テーマにそって「見る・とりこむ」ことで自らの実践を「ふりかえり」、実践分析力と省察力の形成を目指す。

②受講生が各自の課題について、学びの成果を評価する。

○日程 9:00～9:15 園の研究主題について(園長説明)

9:15～11:30 公開保育参観

11:30～12:30 昼食

12:30～13:30 研究協議(研究主題の子どもの姿の見取り・質問等)

13:30～14:00 指導助言

○指導助言 奈良女子大学准教授 本山方子氏

○概要 園の研究主題:『互いに思いやりながら、のびのびと遊ぶ』 3、4、5歳児各2クラス、計6クラスで公開保育が行われた。学級全体で行う活動では、各クラスで特定の「領域」に重点をおいた保育が展開された(例:5歳児Aクラス「スリーヒントゲーム」、領域「言葉」)。



自ら選んで行う活動(園庭での遊び)

研究員は、各自が課題とする「領域」の保育実践を参観すると共に、対象園の研究主題に沿い、「思いやりながらのびのびと遊ぶ」子どもの姿を見取ることを目指した。

研究協議では、まず担当保育者の保育についての説明の後、研究員がとらえた「互いに思いやりながらのびのびと遊ぶ子どもの姿」を報告し合った。指導助言の本山氏からは「のびのびと遊ぶ」「思いやる」ということについて、当日の子どもの姿をもとに概念整理をした上で、両者は必ずしも両立せず、時に背反するが、問題を共有し、他者のうまくいかなさを理解し、それを打開する経験が役立つことなどを、指導いただいた。

#### ○成果 : 保育実践の共有①(3歳児保育)

対象園では、奈良市立幼稚園で唯一、3歳児保育を行っている。今回の公開保育で初めて幼稚園での3歳児保育を目にした保育者も多かった。自己評価(ふりかえり)にも、幼保ともに、「3才児と4才児の一年間の発達の差も感じる事ができました。また、教師の言葉かけや援助の仕方についても、3才児と4才児でずいぶん変わることや、3才児でも経験を積み重ねることのできるようになっていくことなども学ぶことができました(幼稚園)」、「3才児クラス中心に見させていただきましたが、担任が一人ということに驚き、一人一人の思いを受け止めていくことが、苦勞されているだろうなあと思いました。」(保育園)など、3歳児保育の見取りに関する記述が多かった。

#### (4) 第4回 公開保育：公立保育所

○日 時 平成22年11月8日(月) 9:00～14:00

○開催園 奈良市立京西保育園(奈良市六条西1丁目3-43-1)

○参加者 38名(内、研究員23名)

○目 的 ①公開園(保育所)の実践を、園の研究テーマにそって「見る・とりこむ」ことで自らの実践を「ふりかえり」、実践分析力と省察力の形成を旨とする。

②受講生が各自の課題について、学びの成果を評価する。

○日 程 9:00～9:15 園の研究テーマについて(園長説明)

9:15～11:30 公開保育参観

11:30～12:15 昼食

12:15～14:00 研究協議

○指導助言 帝塚山大学教授 清水 益治氏

○概 要 園の研究主題：『表現力を豊かに』

0～5歳児まで計8クラスで公開保育が行われた。各年齢で研究主題に基づき、今年度、力を入れる取り組みが設定されており、年間計画表に沿って

保育が行われていた(例：4歳児「音楽リズム」)。設定保育では、4歳児2クラス合同の「音楽遊び」を参観した。研究員は、対象園の研究主題に沿って「表現力を豊かに」する保育実践について自らの課題の観点から見取ることを目指した。

研究協議では、まず担当保育者の本日の保育にかかわる説明の後、研究員がとらえた「表現力を豊かに」育む保育者の援助や子どもの姿について報告し合った。

指導助言の清水氏からは、「保育所における『かかわり』と幼稚園における『関わり』」と題して、本日の公開保育について指導いただいた後、「公開保育の見方」「これからの保育者に求められること」について、ご講義いただいた。

○成 果 : 保育実践の共有②(保育所保育)

本研修が、奈良市初の公立保育所での公開保育となった。保育所間での実施はあったが、幼稚園教諭が保育所保育を参観するのは今回が初めてであった。本研修は、幼稚園教諭が保育所保育の実際を知る初めての機会となった。

幼稚園教諭の自己評価(ふりかえり)においても「初めて保育園の公開保育を見せていただいて、コーナー保育があることや、保育士のかかわりからお母さんのようなとても温かな声のかけかたなどから、家庭的な、そして一人一人が安心して自分を表現できる場所が『保育園』なのだと感じました」、「幼保の保育について違いを知ることができました。0～5才が同じ園内で活動するには、時間帯、環境構成の工夫、保育者の関わり方の違いが大きく表れていて、年令ごとにいろいろな工夫が見られ、保育園の様子を知ることができました。」など、保育所保育を知ることができた、という記述が大半を占めた。



研究協議の様子

## 2-2. 先進地の視察研修（抜粋）

### ●奈良市立認定こども園都祁保育園・大和高田市の認定こども園高田こども園

○日 時：2011年1月22日（土）9：00～16：00

○用務先：奈良市立認定こども園都祁保育園（奈良市都祁白石町 1026-6）

大和高田市立認定こども園高田こども園（大和高田市内本町 1801-7）

○出張者：研究員 26 名、教育委員会・保育課関係者 3 名、大学教員ほか 4 名

### ○目 的

市内や近隣地域の認定こども園を実際に視察することを通して、認定こども園の利点や課題を把握し、今後の幼稚園や保育所、こども園の在り方を考えるための示唆を得る。

### ○内 容

#### （1）奈良市立認定こども園都祁保育園（保育所型）

定員：短時間 30 名、長時間 130 名（3 歳未満児 40 名、3 歳以上児 90 名）、計 160 名

職員：園長 1、副園長 1、保育士 27、その他 3、計 32 名



温かな雰囲気保育室

奈良市立認定こども園都祁保育園は、保育園 6 園を統合し、新園舎を建設、平成 22 年 4 月 1 日に開園した。保護者の就労に関係なく、幼児教育が受けられる施設及び地域の子育て支援を行う保育所型施設である。従来の幼児教育を主体にしながら、子育て支援の拠点としての 0～2 歳の未就園児保育（園庭開放、毎週火曜）や子育て相談、短時間利用児の預かり保育（平日・土曜・夏休みなど長期休業中）を充実させている。

**短時間利用児**：3～5 歳児の利用で 9 時～14 時の保育時間、副食給食を実施している。1 ヶ月 15 日以内の預かり保育が利用できる（1 日 500 円、チケット制）。**長時間利用児**：従来の

保育園と同様に 0～5 歳児の利用で、月～金は 7 時 30 分～18 時 30 分、土は 16 時まで。

#### <岡村美紀子園長より> リズム室にて

・都祁にも幼稚園を作ってほしいという要望に応えた。保護者や地域の協力で支えられている。

・開園まで、子どもたちの交流、保護者同士の交流、保育士同士の交流、地域への説明などを行ってきた。

・短時間利用児の保護者から、長時間利用児と差ができないか心配する声もあったが、全員揃う午前幼児教育の活動を行い、午後は家庭的に過ごすことを話して解決している。

・3 歳児クラスは、保育経験のある子どもと、初めて家庭から離れた子どもがいるため、基本的な生活習慣の自立等に差があり、対応の難しい面もある。



子育て支援室

・木目調の保育室、高い天井、ウッドデッキのテラス、広々としたエントランスや廊下など、開放的で温かな雰囲気印象的だった。保育室とトイレをつなぐ窓、明るいトイレ、廊下にある絵本の広場など、空間や採光が工夫されているほか、布や植物を利用した手作りの装飾など、園長中心に職員全体で、子どもたちのための居心地の良い場所作りに取り組まれてきた努力がうかがわれた。



廊下の絵本の広場

## (2) 大和高田市立認定こども園高田こども園（幼保連携型）

定員：短時間 120 名、長時間 100 名（3 歳未満児 40 名、3 歳以上児 180 名）、計 220 名  
職員：園長 1、副園長 1、主任 1、保育士 29、その他 1、計 33 名



大和高田市立認定こども園高田こども園は、平成 22 年 4 月 1 日から、「幼保統一指導計画」に沿って、幼稚園教諭と保育士の両資格を持つ職員を配置し教育・保育にあたっている。長時間利用児と短時間利用児がともに生活するほか、一時保育（週 3 日以内）や親子の交流広場など子育て支援も充実させている。

**短時間利用児**：3～5 歳児の利用で 8 時 30 分～14 時、

給食を提供。預かり保育は 1 ヶ月 5 日以内で 14 時～16 時（1 日 200 円＋おやつ代 50 円、布団代 150 円）。

**長時間利用児**：従来の保育所と同様 0～5 歳児の利用で、月～金 7 時 30 分～19 時、土は 16 時まで。

<益田恵子園長より> リズム室にて

・開園まで、幼稚園と保育所で週 1、2 回話し合いの機会を持ち、反対する保護者への説明会も開いた。

・3 歳以上児では、幼稚園教諭と保育士が担任している。最初は不安もあったが、実際やってみると問題はない。

・全体の状況を見て、配置が空くと雑務や応援に入る職員がいる。夕方は職員の他に、固定パートが 2 名入る。

・シフトが複雑なので職員室に職員配置の連絡ボードを用意した。引き継ぎ時、連絡ボードと長時間日誌を確認する。



一時預かり保育の部屋



職員配置の連絡ボード

## ○成 果

認定こども園開園までの準備、開園後のシステムづくり、今後改善したい点など、具体的な話を伺うことができた。子どものために、保育士と幼稚園教諭の職員同士が協力し、まずは前へ進むことが大切であり、保護者や地域の理解と協力も必要不可欠だと感じた。

### 2-3. 講演会

本研修プログラムは現職保育者31名の研究員を対象としたものであるが、全市の保育者にも研修機会を広げ、学びの機会を提供するために、以下に示す2回の講演会を行った。

#### (1) 第1回 講演会：『幼児教育の今後：幼保一体化と小学校への接続の流れの中で』

○日時 平成22年11月12日(金) 18:00～20:00

○場所 春日野荘(奈良市法蓮町757-2)

○講師 白梅学園大学子ども学部教授 無藤 隆氏

○参加者 116名

○目的 ①変革期にあるわが国の幼児教育について、施策の中心にいる無藤 隆氏を招き、その動向を知る。

②変革の時期だからこそ、今、保育現場に求められることを把握し、これからの奈良市の保育のあり方について考える。

○概要 「幼保一体化」「小学校への接続」をキーワードに、特に「幼保と小の間のカリキュラムの原理の違いとつながりの作り方」および「幼児期の教育のいくつかのポイントについて」、配付資料をもとにお話しいただいた。



無藤 隆氏

○幼保と小の間のカリキュラムの原理の違いとつながりの作り方

- 1) 幼児教育の原理は遊びにおける学びの芽生えにある
- 2) 幼児教育の方法は環境を通しての保育にある
- 3) 小学校教育の原理は自覚的な学びにある
- 4) 小学校に向けて「学びの基礎力」(学びの芽生え)を育てる
- 5) 芽生えにおいて進めること
- 6) 小学校学校低学年では名残を生かす

○幼児期の教育のいくつかのポイント

- 1) 運動する力の基礎を育てる
- 2) 算数の基礎を育てる
- 3) 国語の基礎を育てる

無藤氏は、講演会前日(平成22年11月11日)に報告がまとめられた「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関する調査研究協力者会議」の座長でもある。保幼小接続について、まさに最新の情報を提供していただいた。

無藤 隆氏 講演配付資料より抜粋。

#### ○成果 : 小学校接続を意識した「就学前カリキュラム」作成への示唆

奈良市は就学前教育の充実を目指して、「奈良市立幼稚園・保育園・認定こども園 教育・保育カリキュラム」を作成し、幼保の一体化に向けて、認定こども園の開設などに取り組んできた。また、カリキュラムの作成の目的の1つは、市内のいかなる保育機関に所属する子どもにも、就学前に等しく育みたい力を明確化することであった。

それゆえ無藤氏の講演から、小学校接続を意識した就学前教育のカリキュラムのあり方について示唆を得るとともに、小学校への接続を意識しながらも、幼児期ならではの教育を行うことの重要性が、教育の具体と共に理解することができた。

## (2) 第2回 講演会：『「対話的保育」カリキュラムへの<sup>いざない</sup>誘い』

○日 時 平成23年2月27日(土) 13:30～15:30

○場 所 春日野荘(奈良市法蓮町757-2)

○講 師 山梨大学教育人間科学部教授 加藤 繁美氏

○参加者 120名

○目 的 ①子どもを中心にすえた保育カリキュラムの作成について学ぶ。

②保育実践をくぐらせながら、作成したカリキュラムを改善していく方法を学ぶ。



加藤 繁美氏

○概 要 加藤氏は、幼児教育学、中でも「保育カリキュラム」を専門とされ、子どもの声に耳を傾けることから始まる「対話的保育」や「対話的保育カリキュラム」の理論と実践の構築を提唱されている。

本講演では、近代教育の出発の書であるルソーの『エミール』やデューイの『学校と社会』の一節を参照にしながら、今、求められる保育は「生きることの喜びと希望を育てる保育」であることをまず強調された。その上で、配付資料やスライドを用い、実際の保育実践のエピソードを紹介しながら、「対話的保育」とは何か、「対話的カリキュラム」とは何か、について

○成 果 講演後の評価シートから、以下の4点が成果として挙げられる。

①**保育者の自信と意欲の喚起**：評価シートで目立ったのは「対話的保育の話聞かせてもらい、自分の保育に自信をもちました」(保育所)、「子ども自身が主体的に活動できることを日々考えながら保育しているので、とてもはげみになった。子どもが自己決定できるよう、配慮、援助していけるよう対話を大切にしていきたい。」(保育所)というように、講演を聞き、自らの保育に自信をもったり、励みとなり、保育への意欲がわいたという記述である。

②**保育者のふりかえりの契機**：「‘教育とは何なのか’や‘自分自身の保育について’振り返ることができたり、考えるきっかけになった」(幼稚園)、「今までの保育の中で加藤先生がおっしゃっていた保育の考え方に近いもののイメージがありましたが、そのことが確実に大切なものだということが実感できました。」というように、加藤氏の講演が自分自身や、教育、保育の在り方についてふりかえるきっかけとなったとの記述も見られた。

③**保育実践への展開**：「保育をすすめていく上で、子どもの願いをしっかりとよみとり、子どもの願いにそくした内容をしていく大切さ(を学んだ)」(保育所)といった講演からの学びや、「保育の中で具体的に取り入れられることを学ばせていただきました」(幼稚園)といった保育実践への展開に触れた記述もあった。

④**保育者の成長**：さらに「実践や内容について、よく理解出来、自分の中で欠けている点やスキルアップをする点の参考になった」と講演が自己成長を促す上で役に立ったとする記述も見られた。

## IV プログラム開発の成果と課題

### 1. 保育者の保育力量の向上

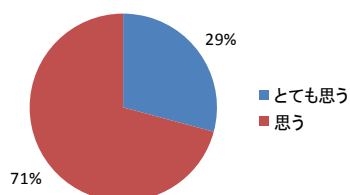
#### 1-1. 研究員の保育力量の形成：研究員の自己評価

第9回の総括研修会（平成23年2月27日実施）の終了時に、本プログラムにおける研究員の自己評価と研修評価のアンケートを行った。回答者は24人。

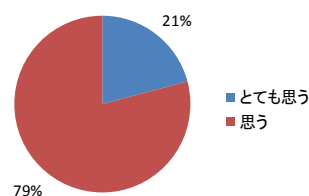
#### (1) 力量形成：「1年前に比べて、保育を〇〇する力がついた」

以下の4項目に関して「1年間の研修を振り返って、以下の質問について、あてはまるものを1つ選んで〇をつけて下さい。」と問い、4件法（「とても思う」「思う」「あまり思わない」「思わない」）で答えを求めた。その結果、いずれの項目の回答も「とても思う」「思う」だった。

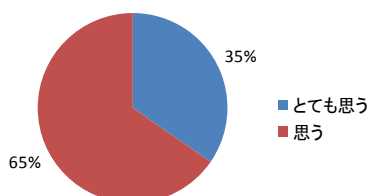
① 保育を見る力



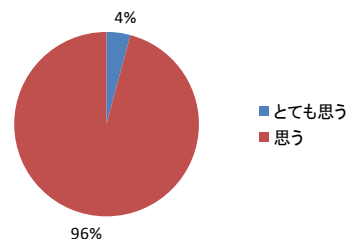
② 保育を記録する力



③ 保育をふりかえる力



④ 保育を実践する力



#### ⑤ 具体的に最も身につけることができた力（自由記述・複数回答可）

##### ・見る力（子ども・保育） 19人（79.2%）

例）・公開保育等で保育の見る視点がわかり、見る力がついたのではないかと思います。  
・保育の見とりをし、自分なりに子どもの思いを考えたりすることができた。  
・保育を見る力が身についたと思います。ただ、その場面だけではなく、子どもが  
どういうところに楽しさを感じているか、人やものとのかかわりを楽しんでいる  
か、どういう援助があったか、じっくりと見ることがわかりました。

##### ・記録する力 4人（16.7%）

例）・保育をみながらエピソードをとらえ、くわしく書いたり、子どもの言葉や行動に  
意味を見いだそうとする力（公開保育を通じて子どもの姿を深くとらえて討議し合  
えた）。

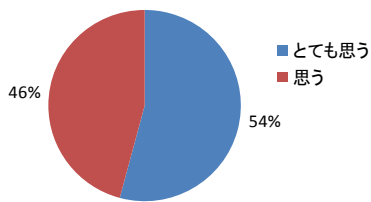


・ 多様な視点 2人 (8.4%)

例) ・自分の保育の枠を広げることができました。保育は、目の前にいる子ども達に合ったいくつもの方法があり、子どもと一緒につくっていくことが大切だということ。しかし、いきあたりばったりでなく、しっかりした計画をたてることを大事にしていくこと。身についたというより知る事ができたのでこれからの日々の保育で身につけていけるようにしたいです。

(2) 今後の研修意欲 :

① 「もっと保育実践力をつけるために学びたい」



半数以上の研究員が「とても思う」と答えており、全体的に高い学びの意欲を持っていることがわかる。

② 自己課題 (自由記述・複数回答可)

・ 保育を実践する力 (保育力・実践力) 11人 (45.8%)

例) ・子どもの姿を見て、どのように援助していくか考え、実践していく力が必要。  
・研修したことを自分のものにしていく力量を身につけたいと思います。

・ 子どもを見とる力・子ども理解 7人 (29.2%)

例) ・子どもを見とる力です。子どもの目に見えないつばやきに気づける保育者になりたいです。  
・園内の先生とともに子ども理解をする力。

・ 伝える力 5人 (20.8%)

例) ・研修で学んだことをまわりの保育士に伝え、共に保育の質を高めていくことが課題だと思う。  
・他の保育士に伝える力が不足している。まわりをまきこむコミュニケーション力をつけたいと感じます。

(3) まとめ: 「見る」「ふりかえる」力の育成から「実践する力」の形成へ

① 成果 本研修プログラムでは、研究員は全体的に保育にかかわる力が身についたと肯定的に評価していた。その中でも最も多くの研究員が身についたと思う力は「保育をふりかえる力」と「保育を見る力」であった。本プログラムの核となる研修は「公開保育」と「先進地視察」である。これらはいずれも「他者の保育実践を見る」研修である。他者の保育を「見る」ことが、自身の保育や子どもを「見る」力を養い、自分の保育を「ふりかえる」力の育成につながっていた。

しかし「見る力」は「何を見るか」といった対象によって、求められる力が異なってくる。保育においては、目に見える「行為」だけではなく、子どもの気持ちや意図、行動の

意味など、目では見ることができないものを「みる（見とる・理解する）」ことも求められる。「（最も身につけることができた力は）子どもを見ること。見取るところまではまだまだできていないので、今後より勉強して力をつけていきたいと思います。」といった研究員の回答もあった。「見る力」の習得は、見る対象によって異なる。このことを踏まえた研修設計が必要である。

**②課題** 一方、今後身につけるべき課題として最も多くあげられたのは「保育を实践する力」である。「公開保育」や「視察」では、公開保育の担当園や視察対象園の保育者以外は、自らが保育実践をすることはない。他者の保育を見て、とりこみ、自分の保育をふりかえって、実践する。「見る」ことと「実践する」ことをつないだ研修が求められる。

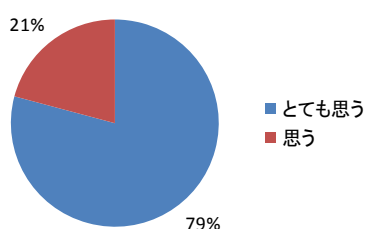
また、自分が受けた研修内容を園に戻り、他の保育者に伝えることの難しさをあげた研究員が多くいた。保育はひとりではできない。チームワークの営みである。研修の学びをいかに他の保育者に伝えていくか。研究員コミュニケーション力の向上といった個人の力量に頼るだけでなく、研修システムの改善も必要である。

## 1-2. 研修評価

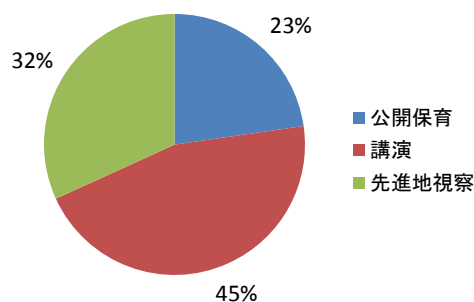
研究員は、本研修プログラムを、どのようにとらえているのだろうか。研修内容に対する評価アンケートも併せて実施した。

### (1) 本研修内容の評価

①研修に満足している



②最も学ぶことが多かった研修（1つ選択）



### (2) 今後の要望

③今後求める研修（自由記述・複数回答可）

- ・ 本プログラムの継続（公開保育・講演会・先進地視察） 4人（16.7%）  
例）・今年度のように実際の保育を通じて、幼保の先生が学びあうことと講演などで理論を学ぶことのできる機会の両者があるとよいと思います。
- ・ 保幼小合同研修 4人（16.7%）  
例）・保・幼・小の先生が集まる研修があればよいと思います。連携を進めていく中で互いのことを知る事が大事だと思うからです。

- ・ 公開保育 4人 (16.7%)

例)・公開保育で具体的に見たり感じたりできるものにひきつづき参加していきたい。

- ・ 講演会 4人 (16.7%)

例)・園の先生方も一緒に参加できる講演会があれば嬉しいです。

### (3) まとめ：理論と実践を往還する研修内容の組み立てを

研修の満足度は非常に高く、「研修に満足している」という問いに8割近くが「とても思う」と答えた。

一方で、最も学ぶことが多かった研修内容の3択では「講演」が半数近くを占めた。本プログラムの特徴は「他者の保育実践をみる」研修を中心に展開する点にある。しかし、そうした内容の研修（公開保育・先進地視察）よりも、「話を見聞きする」講演の学びが最も大きかったのである。それは、なぜだろう。

1つには、本評価アンケートが、講演会直後に実施された点があげられよう。加藤氏の学び多く、興味深い、かつ楽しい講演の余韻のなかで行ったアンケートであった。その影響の大きさは、「『対話的保育』カリキュラムのお話をもう一度聞かせていただきたいです」といった記述にもうかがえる（研修評価：今後求める研修）。

第2に、自己評価アンケートの「自己課題」に「伝える力」が挙げられていたように、他の保育者と研修内容を共有しやすいことも考えられる。保育はチームワークである。1人の学びを園全体で共有することで、新しい保育が生まれる。みんなに伝えやすい、共有しやすい研修が求められている。

第3に、アンケートには「実際の保育を通じて、幼保の先生が学びあうことと講演などで理論を学ぶことのできる機会の両者があるとよい」（研修評価：今後求める研修）といった記述もみられた。研修内容においても、実践だけではなく、理論もきちんと学ぶ機会を保障することが求められている。理論と実践の往還は、現職保育者の研修においても不可欠である。

## 2. 「奈良市立幼稚園・保育園・認定こども園 教育・保育カリキュラム」の検証・改善

奈良教育大学では、平成21年度に教員研修モデル開発プログラム「幼保統合の現職研修のためのモデル・カリキュラム開発」を奈良市教育委員会と共に展開し、「奈良市立幼稚園・保育園・認定こども園 教育・保育カリキュラム」の策定に寄与してきた。

本プログラムにおいても、研修の柱である「公開保育」では、このカリキュラムをもとに保育計画を立て、保育実践を行ってきた。カリキュラムと実践を往還させることによって、カリキュラムの自己点検、評価、改善のあり方、すなわちカリキュラム・マネジメントを進めてきたわけである。

また本プログラムでは、無藤氏の講演会において、保幼小接続について最新の情報を得て、学びを深めることができた。奈良市においても保幼小連携が進められている。しかし、連携をさらに推進させるためには、就学前の教育・保育機関が小学校教育を理解するだけでなく、小学校においても幼児教育を理解することが不可欠である。

そこで本プログラムでは、公開保育の実施と共に検討を重ねてきたカリキュラムの改善に加え、保幼小接続の視点を盛り込んだ『奈良市立幼稚園・保育所・認定こども園 教育・保育カリキュラム』改訂・普及版を作成した。今後、奈良市の就学前教育のあり方についての共通理解を広げるため、市内の小学校にも配布する予定である。また、公立保育所・幼稚園だけではなく、私立の保育所・幼稚園にも配布し、幼保、公私の保育者研修、保幼小連携の研修等においても教材として活用していく予定である。

### **3. 大学と教育委員会の連携の意義と課題**

#### **3-1. 連携の意義：大学が幼保をつなぐ**

国や自治体のレベルで、歴史的にも幼保の一元化・一体化がくり返し議論される中、現実にはなかなか進展を見せていない。幼保が直接向き合うと、教育と福祉の縦割り行政、双方の保育内容の歴史等、両者の間に大きな壁がそびえ立つのである。こうした壁を乗り越え、幼保をつなぐには、そこに第3者が介在することが有効である。そして、その任を担うのは、大学が最適だと考える。

奈良教育大学は、平成16年に奈良市と「奈良教育大学と奈良市との連携協力に関する協定」（教育連携に係る包括協定）を結び、それに基づき、奈良市教育委員会、及び奈良市保健福祉部保育課と緊密な連携をとってきた。平成19・20年には文部科学省専門職大学院等教育推進プログラム「幼保統合の『保育実践知』教育プログラム」を展開し、学生の学びを奈良市立幼稚園、保育園に支援してもらうなど、さらに双方の保育現場との連携も深めた。平成19年度から着手した保育士養成においては、学生の保育所実習は、すべて奈良市公立保育園に担ってもらっている。

このように大学は、行政機関においても、また幼稚園・保育所といった保育現場においても、幼保双方と連携を深めることが可能である。かつ両者との連携において、学問や理論を背景に、客観的な立場からかかわることも可能である。

幼保の間には、保育形態や保育の流れの違いから来る力点の違い、長い歴史の違いからくる文化的な相違点など、ともに就学前の子どもの健やかな育ちを願って日々、保育にあたりながらも、実際は異なる点が多い。その両者の違いを、良し悪しや優劣で比較判断するのではなく、違いが生まれた背景を鑑みながら、これからの未来を生きる子どもたちのために、新しい保育を、保育現場と共に作り出す。そうしたファシリテーターとしての役割を大学が担うべきだと考える。

なお、本プログラムにおいて、実際の幼保の連携は、奈良市教育委員会の事務局を中心

に進めた。本学は、教育委員会を通して保健福祉部保育課とつながる形をとった。幼保の連携の歴史にもよると思うが、大学がすべてをセッティングするのではなく、連携の接点は幼保がつなぎ、それぞれの関係を築いていくことも必要だと考える。

### **3-2. 連携方法の工夫**

#### **(1) 互いの保育を見あつての幼保の保育者の合同研修：互恵的な連携**

本プログラムにおいて、幼・保・認定こども園の「公開保育」を重ねて行う研修は、それぞれの保育を知るよい機会となった。また、共通に目にした子どもの具体的な姿の見とりを意見交換することは、相互理解を深めることにつながった。

なお、公開保育を実施する園の保育者にとっても有益なものにするために、その園の研究主題にそつた視点で観察を行った。また、保育者の援助に焦点をあてるよりも、まずは子どもの姿に焦点づけた報告を行った。すると、保育担当者にも、日頃研究している保育の内容や子どもの姿について、新たな気づきが多くあり、学びが深まった。なにより、公開保育を引き受けてよかったという肯定的な感想が聞かれた。

#### **(2) 同一研究員による通年の継続研修：連携の継続**

研究員には、今後の奈良市の保育・幼児教育界を担う人材を、ベテラン層、若手層を交えて選出した。本研修はこれらの人材が交流し、関係を深める場としても機能した。プログラム終了後も、研究員のつながりを生かした活躍が期待できる。

### **3-3. 今後の課題と展望**

#### **(1) 課題：研修評価と研修効果の波及**

①評価 本プログラムでは、研究員の自己評価は、研修後毎回のシートへの記入、総括研修会後の最終評価等、くり返し実施し、研究員自身も学びの成果を感じていた。また、さらなる研修への意欲も高かった。しかし、評価委員会を開催し、外部評価を受けることができなかつた。内部からの評価だけではなく、客観的な評価システムの構築が課題である。

②研究員以外への研修効果の波及 特定の研究員を選出し、継続的に研修に参加してもらうことは、選出された研究員本人の力量形成には有効であつた。しかし、研究員自身も課題と感じていたように、研修に参加しない保育者に、どのように研修の効果を波及させるかが、今後の課題である。

#### **(2) 展望：養成教育と現職研修の連動**

教育委員会との連携を今後も継続、発展させ、大学として現職保育者の実践力養成に寄与していきたいと考える。その際、教員養成大学として、学生の保育者養成とも連動させた現職研修体制を構築していきたい。

## **V その他**

[キー・ワード：幼保合同研修・公開保育・保育実践知・幼保統合のカリキュラム]

[人数規模 D（研究員は31人、講演会は120）]

[研修日数 C（合同研修9回・個別視察研修1回）]

### **【問い合わせ先】**

国立大学法人 奈良教育大学 幼年教育教室

〒630-8528 奈良市高畑町 TEL 0742-27-9108（総務課 国際交流・地域連携担当係）